
空の階（きざはし）―追憶の夏―

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の階——追憶の夏——

【Nコード】

N2738A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

売れないミュージシャンの俐生^{りき}。彼は人生最大の窮地に追い詰められ、煮詰まった末、豪雨で荒れ狂う川に投身自殺を図った。そして、話は思わぬ方向へ動いていく。幼い頃、もう帰らない「あの日」を彷彿とさせるような純愛ストーリー。

追憶―あの日の川―（前書き）

維月です、どうも、ご無沙汰しておりました。

こちらの手違いで、話がバラバラになってしまい、畏れ多くも前作（駄作）を読んでくださった読者様方、ホントにすみませんでした。なんとか、再会始めますので。

よろしく………お願いします。（ぺこり）

追憶―あの日の川―

今から14年前、同じ場所の河川敷の川岸。

「おい俐生！ お前、また幽霊ななかまと交信してたなっ」

「ほーら、さつさと正体現せよ」

複数の子供たちが、木の枝の先に刺した、テストの答案用紙を振り回していた。

「返せ！ 返せってばっ」

転んで、泥だらけの少年・俐生は必死に抵抗する。

「見るよこれ、全然読めねえよ」

「ほんとほんと」

ぐしゃぐしゃになった答案用紙を、回し読みしながらケタケタと笑ういじめっ子。

「もう、返せよっ！」

「あっ、こいつ……まだ抵抗する気かっ」

いじめっ子の中の一人が、じたばたと暴れる俐生を、思いきり突きとばした。

「わっ、うああっ！？」

倒れる体。地面から、足が離れる。

ふわり、と体が浮く感じがして、俐生は、水中に沈んだ。

ばしゃんと、派手な音がして、川面に水柱が立つ。

「わっ、やつべっつ、逃げろっ」

一気に退却するいじめっ子たち。

子供たちは、誰一人として、俐生を助けようとはしなかった。

「た、助けっ……ゴボッ、俺、泳げな……」

そのまま、伸ばした手は、空しく宙を掴んだ。

沈んでいく体。

重く、自由にならない手足。

（苦しいよ、苦しいよあ……俺、ここで、死んじゃうの？）

背中が水底について、俐生は一気に空気を吐きだした。

水の底から見る空も、青いんだな……そんなことを思いながら、俐生は目を閉じた。

その時。

背中を持ち上げられる感じに、俐生は爆^はぜんばかりに目を見開いた。そのまま、勢いよく水から引きあげられ、俐生は噎せる。

「げほっ、げーほげほっ！」

「ちよつと、大丈夫！？　どこも苦しくない？　全く、ひどい子供たちね、もうっ」

「お、お姉ちゃんは？」

ぷりぷりと怒る少女に、俐生は深々と首を傾げた。

いくら初夏とはいえ、水も大気も冷たいのに目の前で微笑んでいる彼女は、レースのカーテンのように薄い服を着ている。

しかも、結構な深さのある水中から、自分を助けてくれた筈なのに、全く水に濡れていないのだ。

「お姉ちゃん、妖精？　寒くないの？」

「うん、大丈夫よ。あなたには、あたしが見えてるのね？」

「やつぱり、妖精なんだ？」

「あたし、狭由良^{さゆら}というの、あなたは？」

につこりと笑いかけられて、俐生はきょとんと首を傾げた。

「俺は、俐生っていうんだ……けど、ずっとイジメられっぱなしで、弱いんだ」

「ううん、全然。あなた、強いわよ？　ちゃんと『これ』取りかえしたじゃない」

狭由良は、そつと、俐生のきつく握りしめられた左手を開いてやった。

そこには、クシャクシャによれてしまった答案用紙。

「ね？　俐生、偉かったね」

優しく頭を撫でる手に、俐生はいつの間にか警戒をなくしていた。

「お姉ちゃんも、キレイだよ。見たことないけど、神さまみたい」
「本当にいい子ね、きれいな魂の色してる」

季節は、春から夏に移ろい、俐生は足繁く狭由良に会いに行くようになった。

学校が終わると、弾丸のように教室を飛び出し、川に向かうのが最近の俐生の日課になっている。

「狭由良ーっ！」

「おかえり、学校終わったのね？」

白百合を摘んでいた彼女は、微笑みながら振り向く。

「うん！ 狭由良に早く会いたくて、走ってきたんだ」

「あまり走らないでね、ケガしたら危ないわ？」

「平気だよ、平気」

「ねえ、俐生……見てて？」

狭由良は、一本の白百合を丸めてから、ふわりと宙に放した。
話した白百合は、白い小鳥になって、青空に羽ばたいていく。

「うわぁ！ すごい、すごーいっ」

ぴよこぴよこと跳ね回る俐生に、狭由良はふと悲しげな眼差しを向けた。

（この子は、怖がらないかしら……あたしの正体を知っても）

「ねえ、俐生……あなたは、あたしの本当の姿を見ても驚かないかしら？」

「うん！」

迷いなく応えた俐生の頬に、狭由良はそつと口づけた。

瞬間、俐生の頬が桜色に染まる。

それから強い風が押し寄せ、俐生は慌てて小さな体を縮めて、顔を庇った。

「俐生、目を開けて？」

いつまでそうしていただろうか、俐生は狭由良の声に顔を上げた。

俐生は、息をのんだ。華奢な白い龍が、俐生を見ていたからだ。

「さ、狭由良？」

「うん……ビックリしたでしょう？」

「ううんっ、ホントにキレイだっ」

俐生は、思いきり龍の首に抱きつく。

「……俐生」

「これ、なあに？」

俐生は、龍になった狭由良の首に、二重に掛かっている首飾りに触れてみた。

薄紅色と、空色の、二つの勾玉に。

「キレイでしょ、あたしの宝物」

狭由良は、いつの間にか人形にんげいに戻っていた。

「俐生は、宝物ってある？」

「うん、あるよ！ たーくさん、今度見せてあげるよ」

「ありがとう、今日はそろそろ帰った方がいいわ？ もう少しで雨が来るから」

「ええ？ こんなに晴れてるのに」

「また明日ね？ 俐生、待つてるから」

不服そうな俐生の頭を、狭由良は優しく撫でる。

「そっかあ……うん、また明日」

ぱたぱた、とまるぶように走り去った俐生を見送る狭由良の顔は、ひどく悲しげだった。

許されないことをした。

人に、恋をしてしまったのだ。

自分には、きつと明日は来ない。

待っているのは、重く、深い咎とがだけ……

旅立ちの日に（前書き）

売れないミュージシャンの俐生は、入水するが、底でかつての恋人（？）龍の少女の狭由良と再会を果たし……！？
彼女との約束を果たそうと、人界に別れを告げて、共に旅立つことを決意した。

遠い夏の　あの日　の物語、遂にフィナーレ。

旅立ちの日に

《うんっ、約束だ!》

声が、遠ざかっていく。

そして、そのまま静寂に同化していった。

(俺…… ホントに、死んじまったのかなあ?)

視界には、明るいのか、暗いのかわからない混沌としたモノが広がっている。

自殺した、死んだのに感覚と言ってはおかしいが、なにかふわふわと漂うような感じがするのだ。

これは、この感じはなんだろう?

以前にも、知^{まえ}っているような?

——と、俐生の思考が溶けかかった瞬間、甲高い、少女の聲がぴしやりと彼をぶった。

「……き、ちよつと俐生! ねえっ、しっかりしてよ! 俐生ったらっ」

「おおわっ!？」

いきなり強くぶたれ、揺さぶられた俐生は、堪らず飛び起きた。

「あれ、ってか……俺、生き、てる? なんでだ?」

はた、と、今さらのようにぺたぺたと全身を確かめる俐生。

「足、あるよな? 幽霊じゃねえ」

「当たり前よ、あたしが助けたんだもの」

グルグルと悩んでいた俐生のすぐ後ろで、少女は不服そうに、その白い頬を膨らます。

「え?」

「やつと正氣に戻ったようね、俐生。あたしを憶えてる?」

俐生は振り向くと同時に、やかんのように沸騰してしまった。

なにしろ、目の前にいた少女は、ぬけるような白磁の肌、銀色に透ける長い髪。

目の覚めるような、絶世の美女だったのだから。

「ななっ、なっ……」

屍餅をついたまま、酸素不足の金魚のように口をパク付かせる。

（お、憶えてねえ！？ キヤバ嬢？ いやいやっ、とんでもない、そんなはずはっ）

「やだ、ホントに忘れちゃったの？ 狭由良、憶えてるでしょ？」

（狭由良……ああ、そうだ、あの狭由良だ！）

幼い頃に、子供心にも何度も逢瀬を重ねていた……。

「狭由良、ホントに？！」

俐生は、狭由良の細い手を握りしめる。

「俐生……変わったのね？ 背が伸びたのかしら」

「まあ、そりゃあな」

そつと手を離して、俐生は頬をかいだ。

「それに、男の人になったわ」

「……？」

久し振り、と言うか……何年かぶりに会った彼女は、全然、変わって
いなかった。

まあ、龍だし、人間とは違うだろうが。

「で、ここは……？」

キョロキョロとあたりを見まわすと、膜が張つてある。

外に見えるのは、諾々と荒れ狂う泥色を通り越して、どす黒く見える
水。

「俺……どうして」

ぽつりと呟いた俐生に、狭由良は寂しげに眉根を下げた。

「あたしの泡の中よ、俐生……ホントに、変わっちゃったのね」

「変わった、なにがだ？」

「ねえ、俐生……あの約束、忘れちゃった？ 一緒に来てくれるっ
て」

「……」

思わず黙りこむ俐生。

(忘れてた……あの時、あんなに嬉しかったのに)

そんな俐生を察してか、狭由良は明らかに悲しい顔をする。

「俺は……」

その先を、狭由良が言わせまい、とするように遮った。

「どうして、河にいたの？ 河に。会いに来てくれたのでしょうか？」

いやいやをするように、俐生は頭を振り回す。

「行くところも、金もない……周りにも見放されて、生きててもムダなんだ……だから、ここで終わりにしようと思ったんだ」

俐生の思わぬ告白に、狭由良は鋭く息をのんだ。

その手が、ガクガクと震えている。

「俐生！ 死ぬなんて言ってはダメ、そんなこと言わないで！ もつたいないものっ」

「狭由良……」

ぎゅっ、としがみつくと狭由良を抱き締めて、俐生は悲痛に顔を歪ませた。

「死ぬなんて、言っではイヤよ、そんなこと言うくらいなら……あたしといて？」

強く、強くその身を押しつけるように、抱きつく狭由良。

触れた肌は、冷たかった。

「なんで、俺なんだ？ あんな子供の口約束、破ればよかったのに」

「あんな約束でも、あたしには大事よ？ 龍は、嘘は言わない……言えないのよ」

くすくすんと、涙を拭う狭由良を、俐生はなんとも言えない顔で見つめた。

「狭由良、泣かないで」

「ねえ、俐生……居場所がないというのなら、人間の世界に居場所がないのなら、どうかあたしの、あたしの傍にいてくれない？」

「狭由良？」

その時、俐生は見た。

彼女を取り巻く、いや、縛りつける鈍色の鎖を。

「これは？ 狭由良を取り巻くこの鎖は？ 一体……」

「俐生、一緒に、あたしと生きて？ いいでしょう？」

「……ああ」

俐生は、大きく頷いて狭由良を抱き締めた。

瞬間、濁った水中に、幾筋も光が差し込み始める。

光が、水を浄化していくかのように、流れは静まり、いつの間にか嵐は止んで、水は澄んでいた。

「空が、見える……晴れてるんだな」

傍で、狭由良が頷いて、俐生の手を握りしめた。

「ありがと、俐生。これで、呪縛がとけた」

「呪縛？」

「あなたに、会いたくて、でも行けなくて……自分で、自分を縛ってしまったの」

「思い出したよ あの日の約束 忘れてて、ごめんな？」

「ううん、ずっと待ってたの、こんな日が来るのを」

青空には、うつすらと引かれた、飛行機雲が続いている。

ずっとずっと、どこまでも続いている。

狭由良は龍になると、俐生を背中に乗せる。

「どこに行くんだ？」

「……どこへでも、幸せの国かしら？」

「そうか」

人も、すべての者も、いつか、この空の階を昇っていくんだな。

「あ、俺の車だ……燃えてる？」

遙か眼下に、燃え尽きようとしている愛車を見つけ、俐生は狭由良に問うた。

「みんな、あなたを忘れるわ？ それでも、いい？」

「うん……それが、一番幸せだ」

空に、一筋の煙が上ったあの日……。――。

俺は、ずっと、空を見ていた。

旅立ちの日に（後書き）

どうも、維月です。

『空の階』シリーズ（と言っても、短いですが）、自作の中で、完結作品第1号です。

は〜……（脱力）

ここまで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738a/>

空の階（きざはし）—追憶の夏—

2010年10月12日06時41分発行